



PICK UP

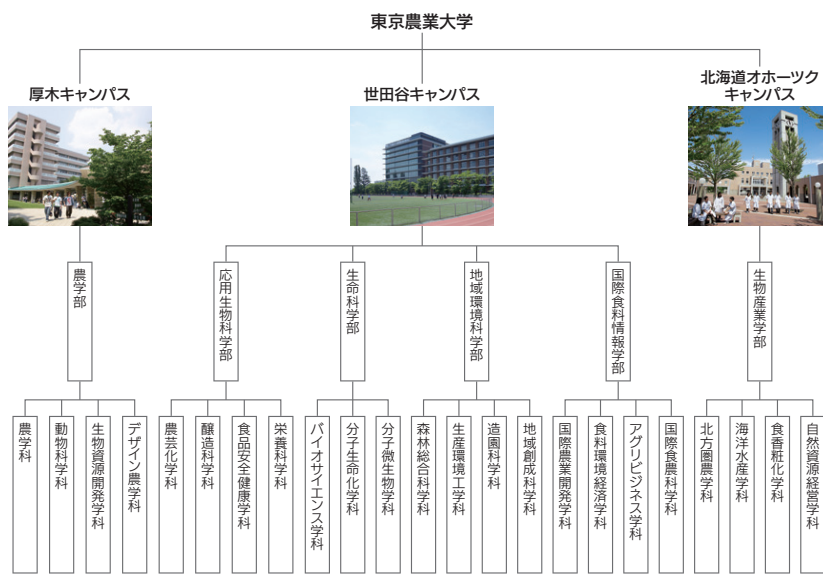
多様な農学・生命科学の分野をカバーする3キャンパス

(1) NODAI Science Port (農大サイエンスポート)

世田谷キャンパスの4学部15学科
83研究室が集う、東京23区内最大
級の教育研究施設。大学が保有する杉
を建材に活用し、学生は自ら育てた木
がどのような加工を経て建材になるの
かを、実学主義に基づき学ぶことがで
きる。エリアー帯はキャンパスの象徴
的空間である「農大の森」に隣接し、
森に向かった窓や素材感など、大地と
の一体感を強調するデザインが採用さ
れている。

(2) 食と農と環境を考える 世界学生サミット

2001年に創立110周年を記念し
てスタート。海外協定校、外国人留学
生および日本人学生が一堂に会し、世
界の食料・環境問題を考え、人類の持
続的発展と青年自らの役割について協
議する場として毎年開催している。



環境・食料問題で最注目の「総合農学」 DXやGXなど先端領域もカバーし、 イノベーションを起こせる人材を育成



えぐちらふお
江口文陽学長

1993年東京農業大学大学院農学研究
科博士後期課程修了。博士(林学)。専門
は林産化学、きのこ学。2021年より現職。
日本木材学会賞、森喜作賞など受賞。

SUMMARY

地球環境問題をはじめ、ウクライナや中東の戦禍のような国際問題でさえも、家庭の食卓に甚大な影響を及ぼしています。こうした危機感が募る中、最先端の学問領域として注目を集めているのが「農学」です。

日本最大の農学・生命科学系大学である東京農業大学は、自然科学系および社会科学系の6学部23学科からなる幅広い学問領域を基盤に、人々の豊かな生活を支える「総合農学」を展開。食料から環境、生命、健康、エネルギー、地域再生まで、多様な学問分野に打ち込める大学として注目を集めています。DXやGXなどの先端領域までをカバーし、イノベーションを起こせる人材育成を推進する同大の教育・研究をご紹介します。

01 実学主義の伝統を継承し 「総合農学」を追求

1891年、幕末から明治期にかけ活躍した英傑・榎本武揚が設立した徳川育英会育英堂農科をルーツとする東京農業大学。130年以上にわたる歴史と伝統を受け継ぎながら、今日では農学の幅広い学びをカバーする6学部23学科を整備。食料から環境、生命・健康、エネルギー、地域再生まで、多様な学びから自分の興味と関心につなげた学問分野に打ち込むことのできる、日本最大の農学・生命科学系大学に発展しています。

地球温暖化をはじめとする近年の環境変化は、世界各国に再生可能エネルギーの活用を促し、そのための資源獲得競争も激しさを増しています。こうした中、近年では「物を食べる」「服を着る」「住居を確保する」といった日常生活、特に子どもや高齢者など「弱者」の生活が脅かされている点が問題だと江口文陽学長は指摘します。

「今後は資源・農学的な面での食料安全保障が非常に重要になります。本学をはじめとする農学系・環境系の大学は、資源や環境の問題に取り組むための学問的知識や考え方を養うのに加え、人間としての「心」を育むような人材育成が絶対に必要だと考えています」

02 学際的な「農学」の学びで 幅広い視野や人間力を伸ばす

身近な自然環境から地球規模の環境問題まで、幅広い視野で考えられる人材を育成するために、東京農業大学が重視しているのが「総合農学」の考え方です。例えば、植物の生育を支える土づくり一つを取っても、使用する肥料、水はけにつながる礫

04 起業家教育で地域を活性化 農業と金融に強い人材を育成

幅広い教養と豊かな人間力を備え、困難に直面しても自ら考え、乗り越えていける人材の育成を目指す東京農業大学。全学生に卒業論文を必須としているのは、数的・統計的な処理・解析能力を養うだけでなく、一つのテーマに対して課題を設定し、計画を立て、最後までやり遂げる「探究学習」としての側面を重視しているからです。こうした学びにつながるよう、高大連携を推進し、高校での探究活動の支援にも力を注いでいます。また、大学の社会的役割の一つである社会連

(れき)の物理的な構造、日照条件や気温などによって結果には大きな違いが生じます。こうした学際領域での学びからは、物事を総合的に捉えるための「人間力」も養われています。

東京農業大学は充実した教育研究基盤のもと、先端的な研究と特色ある学びを展開しています。学部・学科の垣根を越えた研究交流も盛んで、スマート農業など「単位面積あたりの収穫量」を増やすための新たな生産技術や、食品の安全性を保証するための研究などは特に注力しています。地球温暖化に起因する森林環境保全や、地域防災の問題に対しても農学の視点からアプローチ。人々が豊かに、安全に安心して暮らすための研究を強化しています。

03 総合農学にITを組み合わせた 持続可能な農林水産業を追究

DX(デジタルトランスフォーメーション)やGX(グリーントランスフォーメーション)の推進が進む中、農学とデータサイエンスやAIの融合が注目されています。東京農業大学では2023年度から、全学部生が履修できる「数理・データサイ

携や地方創生への貢献を見据え、アントレプレナー(起業家)教育にも力を入れています。

「起業家的な考え方を身につけていれば、大手企業の総合職として地方勤務に就いた際にも『うつすれば地域おこしにつながるか』といった思考をすぐに展開できます。また、日本が強い農業大国となるためには、金融の世界を知る人材が必要です。起業や経営を含む幅広い教育研究を行うことで、盤石な生産体制の構築や地域活性化に貢献したいと考えています」

と語る江口学長。食料自給率の向上や地域活性化を実現するためには、収益を生み出す新しい農業モデルの構築が不可欠です。市場が世界へと広がる現在、為替や金融に関する知識も重要性を増しています。農業の企業経営化が進む中、農業の現場を理解しながら経営や金融の知見も備えた人材は、今後ますます求められることになるでしょう。

「高校の探究学習のように『大学を探究する』ことで、自分が輝く存在になれる大学を選んでください。教育や研究だけでなく、大学時代にしかできないスポーツや文化・芸術の面から選択してもいいのです。失敗を恐れず、20代のうちにやりたいことへ挑戦してください」と、江口学長は皆さんにメッセージを送っています。

